

大学生におけるアルバイト観とキャリア選択での自己効力感, キャリア意識の関連¹⁾

三保紀裕*

Relationship among Part-Time Job Perspective, Self-Efficacy of Career Choice,
and Career Consciousness in University Students

Norihiro MIHO*

The purpose of this research is to reveal positive aspects of university students' part-time job activities. We conducted an Internet survey of 1,024 university students and investigated part-time job perspective, self-efficacy of career choice, and career consciousness. We found that part-time workers among university students have higher part-time job perspective, self-efficacy of career choice, and career consciousness than university students who have no part-time work experience. The correlation coefficients between part-time job perspective, self-efficacy of career choice, and career consciousness were also higher for part-time workers among university students than for inexperienced students. In addition, our results indicated that among part-time workers, first-year university students showed higher scores than third-year university students regarding part-time job perspective, self-efficacy of career choice, and career consciousness. However, these correlation coefficients were lower for first-year university students and higher for third-year university students. Part-time job perspective as "one of the means to learn about society" and "enjoying" was positively related to self-efficacy of career choice and career consciousness. These results indicated positive aspects of university students' part-time job activities.

key words: Part-time job perspective, Self-efficacy of career choice, Career consciousness, University students

問題と目的

はじめに

大学生のアルバイト活動は一般的な大学生の活動の一つとして広く認知されており、授業に次いで多くの学生が学生生活において経験する活動であるこ

とが指摘されてきた (Benesse 教育総合研究所, 2012; 乾, 2012 など)。しかし、これまで日本の心理学では一部の研究 (杉山, 2007, 2009; 吉田, 1998) を除いて、大学生のアルバイト活動について十分に検討してこなかった。また、大学生のアルバイト活動は学業遂行を阻害するものとして否定的に捉えられ

¹⁾ 本研究は平成 26 年度京都学園大学奨励研究助成を受けて実施されたものである。

* 京都学園大学経済経営学部

Faculty of Economics and Business Administration, Kyoto Gakuen University, 18 Yamanouchi Gotanda Cho, Ukyo-ku, Kyoto 615-8577, JAPAN

る傾向にあり、ポジティブな側面に注目した研究は多くない。

アルバイトへの参加が大学生の間で一般化しつつあるなか、アルバイトによってもたらされるポジティブな側面を心理学的な観点から明らかにすることは、有意義な大学生生活を送る上での示唆を新たに提供しうる。本研究は、上述の点について検討を行うものである。

大学生とアルバイト

アルバイトの定義と本研究が扱う対象 はじめに、本研究における大学生のアルバイト活動の定義と対象を明確にしておきたい。アルバイトそのものに関する定義として良く知られているのは、パートタイム労働法に基づく定義(厚生労働省, 2014)である。それによれば、アルバイトは「パートタイム労働者(短時間労働者)」に該当し、「1週間の所定労働時間が同一の事業所に雇用される通常の労働者の1週間の所定労働時間に比べて短い労働者」とされる。そもそも「アルバイト」という言葉自体が和製であり、小杉(2003)は「ドイツ語の「労働」を意味する *arbeit* という語源はあるが、日本では、有期限の一時的雇用を意味する独特の使い方をしている (p.103)」と述べている。若者のアルバイトについては、「フリーター」などに関する多くの研究の蓄積があるが、意外にもそれらの研究でアルバイトそのものに言及している研究はほとんどみられず、小杉(2003)の指摘がなされている程度にすぎない。

大学生のアルバイト活動に対象を限定した研究(西・柳澤, 2010; 関口, 2010)でも、アルバイトそのものに関する言及はなされていない。ここではアルバイト活動について、それぞれ「学生の立場で産業場面での適応や仕事の方法を学習することができる活動(西・柳澤, 2010)」「普段は家庭と学校を往復する学生が、手軽に企業社会や職業社会に触れることのできる効果的な手段(関口, 2010)」と述べている。「大学生」という身分を軸とした視点からアルバイトを捉えており、卒業後の職業社会への参入が視野に含まれている点が特徴的である。アルバイトへの参加自体は高校生からでも可能だが、大学では高校と異なり、進路選択の選択肢として「就職」の割合が高くなる。このことが上記の捉え方にも反映されていることが見て取れる。

上述の通り、アルバイトそのものの定義は雇用形

態・労働時間に焦点化されているものである。しかし大学生のアルバイト活動の捉え方は、単なるアルバイトへの従事を示すものではなく、大学生としてアルバイトに従事することの意義を含み込んだものであった。このようにしてみると、大学生のアルバイト活動を定義する上では、アルバイト自体の定義に加え、そこに従事する意義を組み込んだ内容とすることが適切であると考えた。そこで、本研究では大学生のアルバイト活動を「大学生として学生生活を送りながら、パートタイム労働に従事すること。そこでの活動は、企業社会や職業社会に触れることのできる機会として機能しうる」と定義する。

大学生のアルバイト活動への参加それ自体は一般化してきている。この背景には社会経済的な要因のみならず、心理的な要因も深く関係しているものと思われる。このことは、高校生よりも大学生の方がより顕著に示されることが想定される。そこで、本研究では上記の定義を踏まえ、大学生に焦点化した検討を行う。

大学生のアルバイト活動 大学生のアルバイト活動については、フリーター問題に関する研究、大学教育における内容と方法に関する研究がなされてきた。前者については、教育社会学領域を中心として数多く展開されている。ここではフリーター問題を、日本型雇用モデルをベースとした正規雇用による就職(新卒一括採用)を前提とした、「学校から職業への移行」からの逸脱」として捉えており、フリーターに至るプロセスの一つとして大卒者・大学中退者に着目している。ここで明らかになっているのは、就職活動の失敗や大学不適應の結果として就業機会を失い、アルバイトに従事する若者の姿であった(例えば小杉(編), 2005など)。これらの若者の多くは、アルバイトが初職であった。しかし日本型雇用モデルでは、フリーターであることが正規雇用に移りにくい要因ともなっている。そのため、結果としてフリーターに滞留せざるを得ない状況も示されている(小杉, 2010など)。このことは正規・非正規雇用といった格差の問題(山田, 2007など)にも通じるものであるが、教育社会学では教育の問題として着目し、在学中における中退予防や就業への移行支援の重要性を指摘してきた。

後者については、大学生の学生生活に関する幾つかの研究において、アルバイト活動が取り上げられ

ている。そこでは時間上の問題から学業との両立を困難なものとし、結果として学業遂行を阻害するという主張が多くなされてきた(倉光, 2008; Steinberg & Dornbusch, 1991; 武内, 2005 など)。しかし、この背景には経済的要因も関係している。これまでの研究から、学生がアルバイト活動をする主たる理由は(1)小遣い稼ぎを目的とするもの、(2)家計(学費や生活費)補助を目的とするもの、とに分けることができる。井上(2005)の指摘にもあるように、学費や生活費の獲得を目的としたアルバイト就労は、学生生活の基盤を形成する役割を担う。特に、大学生の仕送りや奨学金の金額は減少傾向にある(インテリジェンス, 2013; 東京地区私立大学教職員組合連合, 2017)。このような事情から、学業とアルバイトの両立という面で困難に直面し、大学生生活での不適応を引き起こしている事例も報告されるようになってきている(木戸口, 2013 など)。大学生の学生生活に関する研究では、大学生生活への適応や学業遂行に焦点化されやすいため、アルバイト活動については否定的に捉えられる傾向が強かった。

大学生のアルバイト活動と職業選択

アルバイト経験がもたらすもの 一方で、「企業社会や職業社会に触れることのできる機会」という点に着目している研究も一部見受けられる。例えば西・柳澤(2010)は、アルバイト活動を通して、産業現場で働くために役立つスキルや態度、広い視野を獲得することで、職業選択に関わる心理的状态に肯定的な影響を及ぼすことを明らかにしている。また、関口(2010)は、大学生がスキル多様性の高いアルバイト業務に従事することや、アルバイト業務において主体的に仕事に取り組むことが、彼らのキャリア学習やキャリア形成にとって重要な要素であることを指摘している。そして杉山(2009)は、日々の生活におけるアルバイトの位置づけが、キャリア意識の明確化に繋がりうることを明らかにしている。

これらの研究に共通しているのは、(1)卒業後の職業社会への参入が視野に含まれている点、(2)アルバイト経験によってもたらされるものに着目している点、そして(3)もたらされるものとして心理的な側面にフォーカスしている点、の3点であった。このような研究は、数自体が少ないのが現状である。心理的な側面に着目したものとしてはフリーターの職業意識についての研究(下村, 2008 など)もあるが、そ

こではフリーターの特徴的傾向として「やりたいこと」への過度なこだわりに焦点化しており、大学生のアルバイト活動に言及したものではなかった。

大学生のアルバイト活動とキャリア 関口(2010)や杉山(2009)の研究では、アルバイト経験によってもたらされるものとして「キャリア」に言及している。「キャリア」はSuper(1980)の考え方に従えば「A career is defined as the combination and sequence of roles played by a person during the course of a lifetime.(p.282)」, すなわち「個人が人生の過程において果たす複数の役割の組み合わせや連なり」として定義されるものである。ここでは仕事に関するもののみならず、個人の人生における役割全体を9つの主要な役割として示している。そして「キャリア」の発達については、職業的自己概念を発達させ実現していくプロセスであることが主張されている(Super, 1957; 日本進路指導協会, 1962)。日本の大学生にとって、このような問題に直面するのは就職活動の際である。「職業選択≒就職先の決定」とも言える日本の状況を見ると、就職活動を通じた具体的職業の決定とそれに向けた準備がキャリア発達における課題となりうる。

また、大学生の期間はアイデンティティ形成が中心的課題となる時期とも重なる。アイデンティティとは、個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの両方の事実の自覚である(Erikson, 1959)。「自分とは何であるか」についての自己定義を確立すると同時に、職業などについて社会的に定義される自分にふさわしい役割を探し出すことが求められる時期である(山本・Wapner(編著), 1992)。そのため、具体的職業の決定とそれに向けた準備はキャリア発達のみならず、アイデンティティ形成に対しても職業的な面から重要な役割を果たすものである。

大学生のアルバイト活動は職業選択の特徴からすれば、就職活動後の具体的な進路に対して直接的に結びつくことの方が少ないと思われる。そのため、アルバイト活動それ自体がキャリア発達に直接的に影響しうるとは考えにくい、「企業社会や職業社会に触れることのできる機会」という点において、キャリア発達に対する「レディネス」とは関連性があることが考えられる。ただし、これには関口(2010)や杉山(2009)の指摘にもあるように、アルバイトに対する

取り組み姿勢や学生自身におけるアルバイトの位置づけ(捉え方)が大きく関係しているだろう。

職業選択に関わる心理的変数 キャリア発達の概念はキャリア発達課題に対する「レディネス」として測定しうるものであり(下村, 2013), 大学生にとっては職業選択が大きな課題となる。ここでは職業選択に関わる心理的変数について、「キャリア選択での自己効力感」「キャリア意識」の2点から見てみることにする。

「キャリア選択での自己効力感」とは、職業選択に関する行動の結果への自信を示すものである(花井・清水, 2014)。日本でも様々な研究の蓄積がなされており、富永(2008)は進路選択領域に関する自己効力研究についてレビューを行っている。そして、進路選択自己効力が進路選択者の抱える問題や、進路選択意識、態度と比較的強い関連があることを明らかにしている。

そしてここで述べる「キャリア意識」とは、大学生にとって大きな課題である職業選択を成功させるために必要な意識のことである。上述の通り、大学生にとっては職業選択を行っていくための具体的な行動が就職活動であり、これを成功させることは単なる就職先の決定を意味するだけでなく、社会的に定義される役割を見つけ出し、職業的自己概念を実現させることにつながる。梅崎・田澤(2013)は、このような職業選択(就職活動)を成功させるためには、(1)将来に向けた夢や目標、やりたいことなどを明確にすること、(2)人に会ったり、さまざまな活動に参加すること、の2つの意識が重要であると述べている。本研究における「キャリア意識」も、これらの2点に着目するものである。

「キャリア選択での自己効力感」「キャリア意識」の2点は、職業選択に関する多くの研究において取り上げられている。しかし、大学生のアルバイト活動との関連について検討している研究は筆者の知る限りみられない。「企業社会や職業社会に触れることのできる機会」という点に着目すると、大学生のアルバイト活動は、上記の心理的変数とはいずれも関連があるものと思われる。

大学生のアルバイト活動は先に述べたように、大学生生活においては学業遂行を阻害するものとして否定的に捉えられる傾向にあった。しかし、学費や生活費の獲得を目的としたアルバイト就労を行う学生が

一定数存在していることなどを鑑みると、ただ単に「学業を阻害しうるもの」として一義的に活動自体を否定することは現実的ではないだろう。それ以上に、アルバイト経験が職業選択に関わる心理的変数とどのように関わりうるのかを示す方が有益であろう。それはこれまであまり示されてこなかった、アルバイトによってもたらされるポジティブな側面を明らかにすることにも繋がるものである。このような観点に基づいた研究は、ほとんどみられないのが現状である。

本研究の目的

以上を踏まえ、本研究では大学生のアルバイト活動と職業選択に関わる心理的変数の関連について検討を行うことを目的とする。職業選択に関わる心理的変数については、先に述べた「キャリア選択での自己効力感」と「キャリア意識」の2点を取り上げる。そして大学生のアルバイト活動については、学生自身におけるアルバイトの捉え方に着目する。アルバイト経験の有無やその内容は学生によって大きく異なるが、アルバイトの捉え方については経験や内容を問わず学生に問うことができる。職業選択に関わる心理的変数との関連については、アルバイトの捉え方が関係しているとの主張(関口, 2010; 杉山, 2009)からも、アルバイトの捉え方に着目することには一定の妥当性がある。

両者の関連について検討するにあたり、本研究ではアンケート調査を実施する。大学生を対象に広範囲な調査を実施することにより、一般的な傾向を明らかにすることができるためである。大学生の進路選択については、各学年に応じて検討していかなければならない課題があることが示されている(松井・清水, 2008; 野々村, 2001)。そこで、調査実施にあたっては学年を限定せず、全学年を対象とする。

方 法

アンケート調査の実施

調査実施の手続 アンケート調査の実施にあたっては、株式会社マクロミルのインターネット調査サービス「QuickMill」を利用した。調査人数1000人を目安とし、1年生から4年生までの各学年の人数、男女比、文理比が均等となるようにした。また、地域別の人数についても、人数比率が全国の人数分布と同様になるように調整している。対象となる大

Table 1 調査協力者の内訳

地域	性別	1年	2年	3年	4年	合計
北海道	男性	2	7	6	6	21
	女性	6	3	3	8	20
東北	男性	10	13	6	6	35
	女性	8	7	6	8	29
関東	男性	62	52	45	57	216
	女性	49	63	48	44	204
中部	男性	9	18	22	16	65
	女性	18	20	16	21	75
近畿	男性	25	20	28	29	102
	女性	14	19	36	21	90
中国	男性	6	7	6	2	21
	女性	12	4	6	9	31
四国	男性	9	3	5	6	23
	女性	5	3	2	1	11
九州・沖縄	男性	5	8	10	6	29
	女性	16	9	11	16	52
合計	男性	128	128	128	128	512
	女性	128	128	128	128	512

学生は4年制大学生のみとし、留年や休学、半年以上の海外留学経験がある者は対象外とした(なお、浪人経験の有無については設問に入っていない)。

「QuickMill」にモニタ登録している者からランダムサンプリングを行った20000名を対象に、上記の条件を満たす者をスクリーニングした。本調査実施にあたっては、対象者に調査依頼を事前通知の上、承諾を得た者に対してのみ実施した。最終的に1024名が調査に協力した。有効回答数は100%であった。調査協力者に対してはモニタ規約にて「調査についての守秘義務」の徹底をマクロミル社より依頼されている。なお、調査データの回収にあたり、個人が特定されるような情報提供は一切受けていない。

調査は全てインターネット上で回答する形式となっている。株式会社マクロミルが用意した専用ページにアクセスの上、そこで提示された質問項目への回答を求めた。本調査の実施期間は2014年10月下旬の1週間であった。

調査協力者の内訳 1年生から4年生までの各学年層からそれぞれ男女128名ずつ、128名の内訳は文系学生64名、理系学生64名となるように抽出し、各層学年256名ずつ計1024名に対して設問への回答を求めた。年齢の平均値は20.29歳($SD=1.34$)であった。地域別の人数は、北海道地方41名、東北地

方64名、関東地方420名、中部地方140名、近畿地方192名、中国地方52名、四国地方34名、九州・沖縄地方81名であった。これらの人数を整理したものをTable 1に示す。

測定変数

以下に示す各変数について、先に述べた専用ページ上での回答を求めた。フェイスシートについてはスクリーニング時に得た情報を使用しているため、本調査時には各変数に対する回答のみを求めている。1ページにつき、1つの尺度を構成する項目が教示文と共に提示されるようになっている。リッカート法で数値をクリックし、全ての項目について回答を終えると次ページが表示されるように構成されている(項目の提示順についてはランダム表示)。

アルバイト観尺度 三保(2011)によって提案された、アルバイトの捉え方を測定する尺度である。「社会性」「満喫」「面倒」「小遣い稼ぎ」「家計補助」の5つの下位尺度で構成されており、各下位尺度の α 係数は「社会性」から順に0.91, 0.76, 0.91, 0.88, 0.82であった。本尺度は確認的因子分析により5因子構造であることが確認されているほか、大学生生活との関係から尺度の妥当性についても報告されている。教示文として「あなたは、アルバイトをどのようなものとして捉えていますか?」と提示し、各項目について「あてはまる(4)」から「あてはまらない(1)」の4件法で回答を求めた(24項目)。

キャリア選択自己効力感尺度 花井(2008)によって提案された、キャリア選択での自己効力感を測定する尺度である。「自己評価」「情報収集」「目標選択」「計画立案」「意思決定の主体性度」の5つの下位尺度で構成されており、各下位尺度の α 係数は「自己評価」から順に0.90, 0.84, 0.89, 0.89, 0.89であった。また、大学生を対象とした調査から尺度の妥当性についても報告されている(花井・清水, 2014など)。教示文として「現在のあなたは以下の事柄について、どの程度自信がありますか?」と提示し、各項目について「自信がある(4)」から「自信がない(1)」の4件法で回答を求めた(25項目)。

キャリア・アクション・ビジョン・テスト(CAVT) 下村ら(2009)によって提案された、キャリア意識を測定する尺度である。「アクション」「ビジョン」の2つの下位尺度からなる。それぞれの α 係数は「アクション」から順に0.83, 0.92であること

Table 2 アルバイト経験の有無

	性別	1年	2年	3年	4年	合計
男性	あり	104	116	118	111	449
	なし	24	12	10	17	63
女性	あり	111	116	115	113	455
	なし	17	12	13	15	57
合計	あり	215	232	233	244	904
	なし	41	24	23	32	120

が報告されているほか、様々な視点から尺度の妥当性についての報告がなされている(梅崎・田澤, 2013 など)。教示文として「あなたは現在、以下のようなことが、どの程度出来ていると思いますか?」と提示し、各項目について「そう思う(4)」から「そう思わない(1)」の4件法で回答を求めた(12項目)。

アルバイトに関する具体的取組 この1年間の大学生活におけるアルバイト活動への取組度について問う項目である。本調査では大学生活全般に関する具体的取組度について、様々な内容に関する27項目を提示し、それら全ての項目への回答を求めている。ここで述べた「アルバイト活動への取組度」とは、上記27項目の1つとしてある「アルバイト経験」にのみ着目したものである。教示文として「あなたはこの1年間の大学生活(今年の4月～現在までの期間)で、以下の活動にどの程度真剣に取り組みましたか?」と提示し、「真剣に取り組んでいる(4)」から「真剣に取り組んでいない(1)」の4件法に加え、「取り組んだ経験自体がない(0)」を組み込んだ5件法によって回答を求めた。

分析ソフト

本研究の分析では、IBM SPSS Statistics 21.0 Academic Authorized User License (2012年8月14日発売、品番 DOFRELL)を使用した。本ソフトは購入価格が高価であることが難点だが、GUI形式で使い勝手が良い。社会科学系の研究領域で良く使用されている一般的なソフトの1つであることから、本研究でもこれを使用した。

分析と結果

平均値の比較

アルバイト経験の有無による違い アルバイトに関する具体的取組度で「取り組んだ経験自体がない

(0)」と回答した者を「アルバイト経験がない者」、それ以外の者を「アルバイト経験がある者」とした場合における人数の分布を学年・性別ごとに整理したものをTable 2に示す。結果を見ると、「アルバイト経験がない者」の人数は全体の1割程度であった。

アルバイト経験の有無を独立変数、それぞれの下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。等分散性のためのLeveneの検定の結果、有意水準が $p < 0.05$ とならなかった「自己評価」「目標選択」「意思決定の主体性度」「ビジョン」についてはWelchのt検定を適用した。そして、有意水準が $p < 0.05$ であった他の下位尺度については、標準のt検定を適用した。

それぞれの分析結果(Table 3)についてみると、有意差がみられたのは、アルバイト観では3尺度であった。「社会性」($t(1022)=3.27, p < 0.05$)、「満喫」($t(1022)=3.81, p < 0.05$)、「小遣い稼ぎ」($t(1022)=2.61, p < 0.05$)がこれに該当し、いずれの尺度においても、アルバイト経験がある者の方が、アルバイト経験が無い者よりも得点が高かった。

キャリア選択自己効力感で有意差がみられたのは4尺度であった。それは「自己評価」($t(141.97)=2.08, p < 0.05$)、「情報収集」($t(1022)=2.46, p < 0.05$)、「計画立案」($t(1022)=4.21, p < 0.05$)、「意思決定の主体性度」($t(143.32)=2.15, p < 0.05$)であった。アルバイト観同様、いずれの尺度においてもアルバイト経験がある者の方が、アルバイト経験が無い者よりも得点が高かった。

CAVTでは、2尺度ともにアルバイト経験の有無による有意差がみられた。「アクション」($t(1022)=4.72, p < 0.05$)、「ビジョン」($t(143.06)=2.99, p < 0.05$)ともに、アルバイト経験がある者の方が、アルバイト経験が無い者よりも得点が高かった。

学年による違い 学年別の特徴について検討すべく、調査協力者の学年を独立変数、アルバイト観、キャリア選択自己効力感、CAVTの各下位尺度を従属変数とした一元配置分散分析を行った。なお、分析にあたっては、上記の分析で「アルバイト経験がある者」とした904名のみを対象とした。本研究における問いを勘案すると、アルバイト経験者に焦点化した方が望ましいと考えられるためである。

アルバイト観から順に結果を見てみると(Figure 1)、有意差がみられたのは2尺度であった。「社会性」

Table 3 各変数の記述統計

		全体		アルバイト 経験		
				あり	なし	
アルバイト観	社会性	平均	3.21	3.23	3.03	$t(1022) = 3.27^*$
		SD	0.62	0.60	0.70	
	満喫	平均	2.20	2.23	1.98	$t(1022) = 3.81^*$
		SD	0.66	0.66	0.62	
	面倒	平均	2.54	2.52	2.66	$t(1022) = 1.97$
		SD	0.76	0.75	0.83	
小遣い稼ぎ	平均	3.37	3.38	3.24	$t(1022) = 2.61^*$	
	SD	0.54	0.53	0.62		
家計補助	平均	2.89	2.89	2.91	$t(1022) = 0.32$	
	SD	0.73	0.73	0.76		
キャリア選択 自己効力感	自己評価	平均	2.81	2.83	2.67	$t(141.97) = 2.08^*$
		SD	0.67	0.65	0.77	
	情報収集	平均	2.78	2.79	2.65	$t(1022) = 2.46^*$
		SD	0.62	0.61	0.68	
	目標選択	平均	2.68	2.70	2.54	$t(142.34) = 1.94$
		SD	0.74	0.72	0.85	
	計画立案	平均	2.53	2.56	2.27	$t(1022) = 4.21^*$
		SD	0.72	0.71	0.75	
	意思決定の 主体性度	平均	2.81	2.83	2.66	$t(143.32) = 2.15^*$
		SD	0.70	0.69	0.80	
CAVT	アクション	平均	2.69	2.72	2.43	$t(1022) = 4.72^*$
		SD	0.65	0.64	0.66	
	ビジョン	平均	2.75	2.78	2.57	$t(143.06) = 2.99^*$
		SD	0.73	0.71	0.83	

注1：尺度得点は総点を項目数で割っている。

注2：*： $p < 0.05$

($F(3,900) = 4.19, p < 0.05$)、「小遣い稼ぎ」($F(3,900) = 2.73, p < 0.05$)で有意差がみられ、両尺度ともに1年生の方が3年生よりも得点が高かった。

キャリア選択自己効力感では、全ての下位尺度において有意差がみられた (Figure 2)。「自己評価」では、4年生が2、3年生よりも得点が高く、1年生が3年生よりも得点が高かった ($F(3,900) = 8.62, p < 0.001$)。「情報収集」では、4年生が2、3年生よりも得点が高く、1年生が2年生よりも得点が高かった ($F(3,900) = 7.26, p < 0.001$)。「目標選択」では、1年生と4年生が3年生よりも得点が高かった ($F(3,900) = 5.10, p < 0.001$)。「計画立案」では「情報収集」と同様に、4年生が2、3年生よりも得点が高く、1年生が2年生よりも得点が高かった ($F(3,900) = 7.39, p < 0.001$)。そして「意思決定の主体性度」では、4年生が2、3年生よりも得点が高かった ($F(3,900)$

$= 5.54, p < 0.001$)。共通して見られたのは、4年生が3年生よりも得点が高い点であった。そして「意思決定の主体性度」を除く4尺度では、1年生の得点が2年生、あるいは3年生よりも得点が高かった点が特徴的であった。

CAVTでは、全ての尺度において有意差がみられた。「アクション」($F(3,900) = 7.92, p < 0.001$)、「ビジョン」($F(3,900) = 6.43, p < 0.001$)ともに有意差がみられ、両尺度ともに1年生が2、3年生よりも得点が高かった (Figure 3)。

これらをみると、アルバイト観、キャリア意識は1年生の方が2、3年生よりも意識が高くなる傾向にあるが、キャリア選択自己効力感については3年生の意識が低く、4年生、1年生の意識が高くなる傾向にあった。

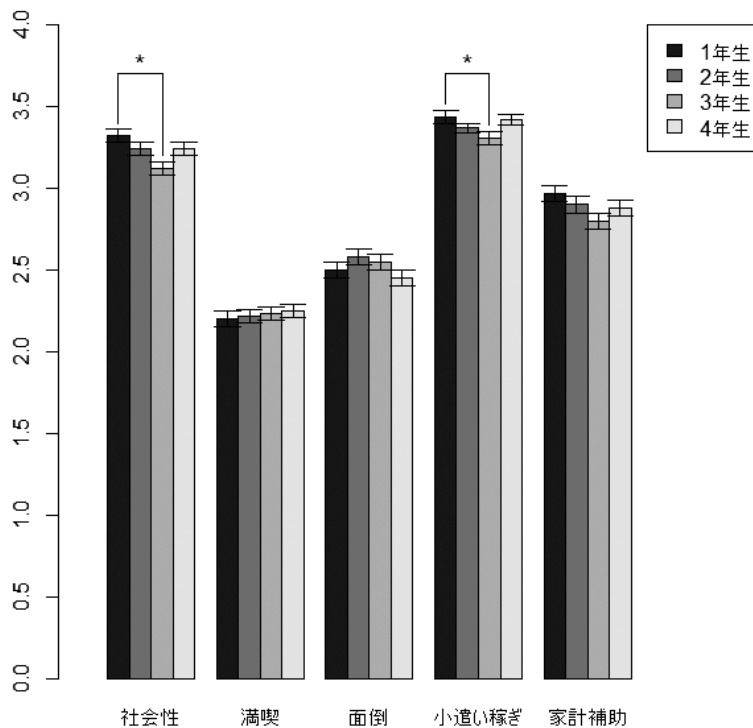


Figure 1 アルバイト観の平均値
注) ヒゲは標準誤差を示す。*: $p < 0.05$

変数間の相関

次に、学年ごとにアルバイト観とキャリア選択自己効力感、CAVT間の相関を求めた。ここでは学年別による平均値の比較同様、「アルバイト経験がある者」とした904名を対象に学年ごとの分析を行った。また、「アルバイト経験がない者」とした120名についても、合わせて変数間の相関を求めた。「アルバイト経験がある者」については上記の変数に加え、「アルバイトに関する具体的取組度(以下、「取組度」と記す)」についても分析の対象とし、アルバイト観との相関を求めた(Table 4)。

学年ごとの結果について、 $r = \pm 0.30$ 以上の値がみられた点についてのみ具体的に記述すると、1年生では「社会性」と「取組度」で $r = 0.46$ ($p < 0.01$)、「面倒」と「取組度」で $r = -0.33$ ($p < 0.01$)の相関がみられた。

2年生では「社会性」と「アクション」で $r = 0.31$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「取組度」で $r = 0.42$ ($p < 0.01$)、「満喫」と「計画立案」で $r = 0.34$ ($p < 0.01$)、「満喫」

と「アクション」で $r = 0.37$ ($p < 0.01$)、「満喫」と「ビジョン」で $r = 0.30$ ($p < 0.01$)、「面倒」と「取組度」で $r = -0.34$ ($p < 0.01$)、そして「家計補助」と「自己評価」で $r = 0.33$ ($p < 0.01$)の相関がみられた。

3年生では「社会性」と「情報収集」で $r = 0.35$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「アクション」で $r = 0.35$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「取組度」で $r = 0.33$ ($p < 0.01$)、「満喫」と「計画立案」で $r = 0.36$ ($p < 0.01$)、「満喫」と「アクション」で $r = 0.37$ ($p < 0.01$)、「満喫」と「ビジョン」で $r = 0.38$ ($p < 0.01$)、「面倒」と「取組度」で $r = -0.37$ ($p < 0.01$)の相関がみられた。

4年生では「社会性」と「自己評価」で $r = 0.32$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「目標選択」で $r = 0.34$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「意思決定の主体性度」で $r = 0.37$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「アクション」で $r = 0.36$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「ビジョン」で $r = 0.30$ ($p < 0.01$)、「社会性」と「取組度」で $r = 0.36$ ($p < 0.01$)、「満喫」と「アクション」で $r = 0.31$ ($p < 0.01$)、そして「面倒」と「取組度」で $r = -0.39$ ($p < 0.01$)の相関がみられた。

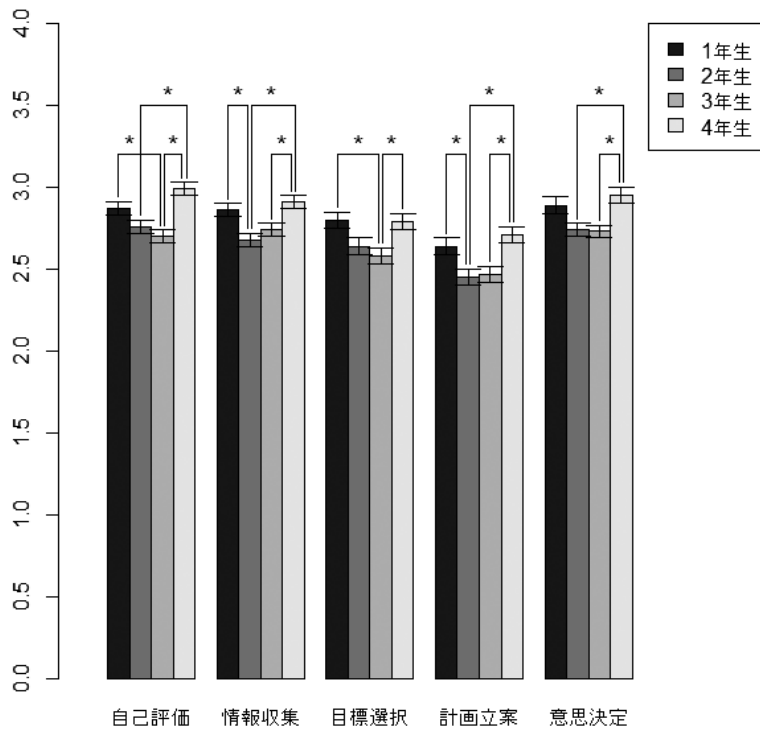


Figure 2 キャリア選択自己効力感の平均値
 注1) ヒゲは標準誤差を示す。* : $p < 0.05$
 注2) 意思決定は「意思決定の主体性度」の略。

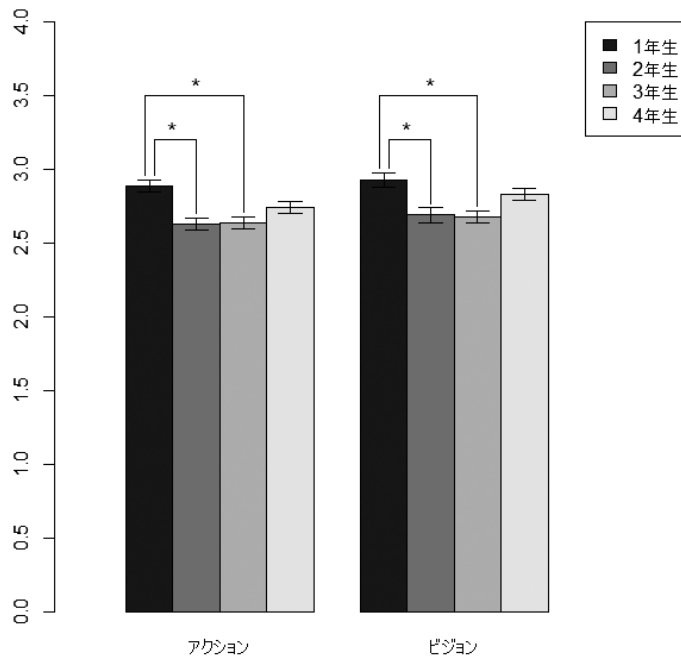


Figure 3 CAVTの平均値
 注) ヒゲは標準誤差を示す。* : $p < 0.05$

Table 4 アルバイト観とキャリア自己効力感, CAVT 間の相関

		キャリア選択自己効力感				CAVT			アルバイト の取組度	
		自己評価	情報収集	目標選択	計画立案	意思決定の 主体性度	アクション	ビジョン		
経験あり	1年生	社会性	0.22**	0.21**	0.22**	0.13	0.24**	0.24**	0.19**	0.46**
		満喫	0.18**	0.18**	0.22**	0.25**	0.17*	0.25**	0.20**	0.06
		面倒	-0.02	-0.01	-0.10	0.03	-0.16*	-0.17*	-0.15*	-0.33**
		小遣い稼ぎ	0.17*	0.13	0.13	0.07	0.11	0.05	0.12	0.23**
		家計補助	0.14*	0.18**	0.17*	0.18**	0.18**	0.15*	0.14*	0.16*
	2年生	社会性	0.27**	0.25**	0.13	0.15*	0.24**	0.31**	0.18**	0.42**
		満喫	0.28**	0.29**	0.21**	0.34**	0.19**	0.37**	0.30**	0.11
		面倒	-0.08	-0.11	-0.03	-0.07	-0.06	-0.15*	-0.09	-0.34**
		小遣い稼ぎ	0.22**	0.15*	0.00	0.00	0.13*	0.09	0.02	0.22**
		家計補助	0.33**	0.26**	0.21**	0.19**	0.21**	0.25**	0.24**	0.11
	3年生	社会性	0.15*	0.35**	0.22**	0.28**	0.22**	0.35**	0.28**	0.33**
		満喫	0.28**	0.16*	0.29**	0.36**	0.22**	0.37**	0.38**	0.00
		面倒	0.02	0.01	-0.08	-0.07	-0.07	-0.20**	-0.13*	-0.37**
		小遣い稼ぎ	0.09	0.21**	0.05	0.05	0.05	0.03	0.05	0.12
		家計補助	0.10	0.16*	0.03	0.09	0.09	0.13*	0.06	0.04
	4年生	社会性	0.32**	0.28**	0.34**	0.25**	0.37**	0.36**	0.30**	0.36**
		満喫	0.05	0.08	0.19**	0.20**	0.15*	0.31**	0.18**	0.08
		面倒	-0.17*	-0.07	-0.15*	-0.09	-0.21**	-0.17*	-0.06	-0.39**
		小遣い稼ぎ	0.21**	0.18**	0.07	0.08	0.13	0.11	0.04	0.13
		家計補助	0.00	0.03	0.05	-0.01	-0.00	0.11	0.04	0.06
経験なし	社会性	0.08	0.29**	0.13	0.16	0.21*	0.28**	0.24**	—	
	満喫	0.06	0.19*	0.14	0.28**	0.10	0.11	0.08	—	
	面倒	0.03	-0.11	-0.15	-0.09	-0.22*	-0.21*	-0.16	—	
	小遣い稼ぎ	0.22*	0.19*	0.09	0.04	0.03	0.01	-0.04	—	
	家計補助	0.15	0.34**	0.09	0.24**	0.21*	0.24**	0.16	—	

注：** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$

そして「アルバイト経験がない者」では、「家計補助」と「情報収集」についてのみ、 $r = 0.34$ ($p < 0.01$)の相関がみられた。

これらを見ると、職業選択に関わる心理的変数と主に関連するのは、「社会性」「満喫」であった。「社会性」とはアルバイトを「社会を知る手段の一つ」とする捉え方、「満喫」とはアルバイトを「楽しむもの」とする捉え方である。「社会性」の得点は1年生の方が3年生よりも高かったが、職業選択に関わる心理的変数との関連については、3年生の方が多くみられた。「満喫」では学年差はみられなかったが、変数間の関連については「社会性」同様、3年生の方が多くみられた。アルバイトを「社会を知る手段の一つ」として捉えることが、職業情報の収集や大学内ではなかなか出会えない多様な人との出会いといった点でプラスに関わっていた。そしてアルバイトを「楽し

むもの」として捉えることが、多様な人との出会いや将来の目標を描き、それを具体的な計画にしていこうという点でプラスに関わっていた。

考 察

大学生のアルバイト活動と職業選択

キャリア選択での自己効力感、キャリア意識と主に関連するのは、アルバイトを「社会を知る手段の一つ」「楽しむもの」とする捉え方（「社会性」「満喫」）であった。これらの変数の得点、関連には、アルバイト経験の有無による大きな違いがあった。Table 3, 4にもあるように、アルバイト経験が無い者の方が変数の得点も低く、上記の変数間の相関についても弱いものであった。特にアルバイト経験者では多くみることができた、「満喫」との相関はほとんどみられなかった。変数の得点がいずれもアルバイト経験

者よりも低かった点を見ると、アルバイト経験が無い者は、職業選択に関する意識自体が低いものと思われる。変数間の相関が低かったのも、アルバイト未経験であるがゆえにアルバイトにおける仕事内容の具体的なイメージがなく、そこでの経験が職業選択に関わりうるという考えに至っていないためであろう。

また、アルバイト経験者においても、学年による傾向の違いがみられた。Figure 1 に示すように、「社会性」「満喫」の得点では「社会性」のみ、1年生の方が3年生よりも得点が高かった。また、Figure 2, 3の通り、キャリア選択での自己効力感、キャリア意識についても、3年生の得点は1年生や4年生と比べて得点が低くなった。このうち、1年生と比べて得点が低かったのは「自己評価」「目標選択」「アクション」「ビジョン」であった。しかし、変数間の相関については Table 4 の通り、キャリア選択での自己効力感、キャリア意識の全ての下位尺度と有意な相関がみられた。 $r = \pm 0.30$ を越える相関の数も3年生の方が多かった。1年生と比べて得点は低くなったが、相関係数の値が1年生よりも高くなったのは「社会性」と「アクション」、「社会性」と「ビジョン」間の相関であった。

このような背景には、本研究の調査実施時期（10月下旬）に3年生が置かれている状況が関係しているものと思われる。この時期は、就職ガイダンスなどを通じて就職活動に向けた具体的な事前準備が本格化し始めることによって、職業社会を知る機会が1年生よりも増加していると考えられる時期であった。現実を知ることによって自信の低下が生じ、そのことが結果として3年生の得点の低さに繋がったのであろう。一方で、職業社会を知る機会の増加からアルバイトの捉え方にも違いが生じ、「社会性」との相関が強くなったものと思われる。1年生では $r = \pm 0.30$ を越える相関が「取組度」としかみられなかったのも、就職活動などに関する具体的なイメージが無い状況であったためであろう。なお、「満喫」では学年による得点の違いはみられなかったが、3年生では1年生と比較すると、「社会性」同様に $r = \pm 0.30$ を越える相関の数が多く示された。アルバイトを楽しむということは、一定の形でアルバイトにコミットしなければ成立しないことであろう。アルバイトとしての仕事を楽しみ満喫すること、そして、就職活動に向

けた準備によって職業選択に関する現実的な視点を獲得する機会が増加していること、の2点が「満喫」との相関に繋がったものと思われる。4年生でもキャリア選択での自己効力感における全ての下位尺度得点が3年生よりも高くなったほか、「社会性」「満喫」とキャリア選択での自己効力感、キャリア意識の関連において $r = \pm 0.30$ を越える相関が3年生同様に多くみられた。就職先の決定を通じて自信が上昇したのと同時に、就職活動を経て職業選択に関する現実的な視点が得られたためであろう。

このようにしてみると、アルバイトを「社会を知る手段の一つ」「楽しむもの」とする捉え方は、就職活動が差し迫った時期のように、職業選択について現実的な視点を持つことが必要となる状況では有益な意味を持つものであると考えられる。また、これらの捉え方が職業選択に関する自己効力感や職業選択を成功させるために必要となる意識と関連することは、大学生のキャリア発達における課題でもある、就職活動を通じた具体的な職業の決定とそれに向けた準備にも少なからず寄与しうるものである。これらの点は、いずれも学業では経験しえない事柄であると同時に、大学生のアルバイト活動におけるポジティブな側面であるといえよう。

また、これらの結果は、キャリアガイダンスに対しても1つの示唆を与えるものであった。それはアルバイトを通じて得ることができた職業社会に関する情報の補足修正である。業種業態にもよるが、アルバイトを通じて得られる情報は大幅の場合、限定的なものである。そのため、就職活動に向けた準備を行う3年生の時期においては、アルバイトを通じて得た情報や経験などを補足修正し、職業選択やそれに関する準備に役立つように支援することが必要であろう。真の意味で職業的・社会的自立を支援するためには、単なる自己PR文やエントリーシート作成にとどまらず、現実的な観点から今後の人生を視野に入れた支援についても合わせて実施していくことが重要であろう。

今後の課題

本研究では大学生のアルバイト活動におけるポジティブな側面を示すことができたが、課題も複数残される。その内の1つが変数間の関連である。本研究における結果はいずれも $r = 0.40$ を越えるものではなかった。必ずしも強い相関とは言えず、慎重な解釈

が必要となる結果であった。これについてはサンプル数の多さによる問題と、学生が従事しているアルバイトの具体的内容やアルバイトに従事している期間などについてまでは考慮していなかったこと、の2点が要因として考えられる。特に後者については重要な問題であり、職務内容と従事期間(時間)を考慮することにより、更なる知見を示すことが可能になるものと思われる。

2つ目の課題は、大学生のアルバイト活動におけるポジティブな側面を明らかにしていく上での方法的課題である。本研究のような横断的なアンケート調査のみでは、様々な経験を通じて生じた時間的変化・成長を捉えることはできない。このような変化やその要因の検討については、縦断調査やインタビュー調査の適用など、本研究で適用した手法とは異なる方法や、これらの組み合わせによる多面的な検討が必要である。

本研究の調査データは2014年10月に実施したものであるため、大学生のアルバイト活動を取り巻く状況には多少なりとも変化が生じている。その変化の1つが「ブラックバイト」を取り巻く諸問題である。このような環境変化にも配慮した検討が今後必要になるものと思われる。

引用文献

- Benesse 教育総合研究所(編) 2012 第2回大学生の学習・生活実態報告書 Benesse 教育総合研究所.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle. Psychological issues Vol. 1, No.1.* New York: International Universities Press. 西平直・中島由恵(訳) 2011 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房.
- 花井洋子 2008 キャリア選択自己効力感尺度の構成 関西大学大学院「人間科学」, **69**, 41-60.
- 花井洋子・清水和秋 2014 キャリア選択自己効力感尺度の構造とモデル—大学生と工業高校生を対象とした因子的不変性の検討— キャリア教育研究, **33**, 29-38.
- 井上理 2005 学生サービスの開発へ向けたオフ・タイム行動の位置づけ IDE, **473**, 17-22.
- インテリジェンス 2013 若年層白書—2013年度版—株式会社インテリジェンス.
- 乾彰夫 2012 若者が働きはじめるとき—仕事, 仲間, そして社会— 日本図書センター.
- 木戸口正宏 2013 学生とともに「働くこと」を学ぶ(教養科目「現代社会と教育」における試み) その1—大学生のアルバイト経験に関する調査と大学教育・学

- 生支援の課題—北海道教育大学釧路校研究紀要「釧路論集」, **45**, 75-84.
- 小杉礼子 2003 フリーターという生き方 勁草書房.
- 小杉礼子(編) 2005 フリーターとニート 勁草書房.
- 小杉礼子 2010 若者と初期キャリアー「非典型」からの出発のために— 勁草書房.
- 厚生労働省 2014 パート労働ポータルサイト～パートタイム労働者の活躍・企業の活力のために～ (<http://part-tanjikan.mhlw.go.jp/parttime/>) (2017年7月23日)
- 倉光修 2008 現代の大学生の苦悩 IDE, **498**, 37-41.
- 松井賢二・清水和秋 2008 大学におけるキャリア形成支援 日本キャリア教育学会(編) キャリア教育概説 東洋館出版社. pp. 211-213.
- 三保紀裕 2011 アルバイト観における半年間の変化と安定性—縦断的因子分析モデルによる検討— 関西大学大学院「心理学叢誌」, **5**, 57-66.
- 日本職業指導協会 1962 職業的発達理論の研究—職業指導研究セミナー報告書— 日本職業指導協会.
- 西宏樹・柳澤さおり 2010 大学生のアルバイト活動を通じた学習—アルバイトの目標と活動の意識化の効果— 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, **42**, 285-292.
- 野々村新 2001 学生相談所を中心にした進路相談 吉田辰雄(編集代表) 21世紀の進路指導事典 プレイン出版. pp. 296-297.
- 関口倫紀 2010 大学生のアルバイト経験とキャリア形成 日本労働研究雑誌, **602**, 67-85.
- 下村英雄 2008 若者の就職における自己と他者—フリーターの・ニートの心性を超えて 大庭健(編著) 職業と仕事…働って何? 専修大学出版局. pp. 97-136.
- 下村英雄 2013 21世紀に生きるスーパー 全米キャリア発達学会(著) 仙崎武・下村英雄(編訳) D・E・スーパーの生涯と理論—キャリアガイダンス・カウンセリングの世界的泰斗のすべて— 図書文化. pp. 168-176.
- 下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 2009 大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発 キャリアデザイン研究, **5**, 127-139.
- Steinberg, L., & Dornbusch, S. M. 1991 Negative correlates of part-time employment during adolescence: Replication and elaboration. *Developmental Psychology*, **27**, 304-313.
- 杉山成 2007 アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか 小樽商科大学「人文研究」, **113**, 87-98.
- 杉山成 2009 アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか(2)—アルバイトの位置づけに関する検討— 小樽商科大学「人文研究」,

117, 1-14.

- Super, D. E. 1957 *The psychology of careers: an introduction to vocational development*. New York: Harper & Row.
- Super, D. E. 1980 A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, **16**, 282-296.
- 武内 清 2005 学修と生活のバランス IDE, **473**, 13-17.
- 東京地区私立大学教職員組合連合 2017 私立大学新入生の家計負担調査 2016 年度〈ホームページ掲載版〉
(<http://tfpu.or.jp/wp-content/uploads/2017/05/2016kakeihutan-essence20170405.pdf>) (2017 年 7 月 30 日)
- 富永美佐子 2008 進路選択自己効力に関する研究の現状と課題 キャリア教育研究, **25**, 97-111.
- 梅崎 修・田澤 実 (編著) 2013 大学生の学びとキャリア—入学前から卒業後までの継続調査の分析—法政大学出版局.
- 山田昌弘 2007 希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く— ちくま文庫.
- 山本多喜司・Wapner, S. (編著) 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房.
- 吉田隆夫 1998 アルバイト学生の就労意識に関する調査研究 (I) 芦屋大学論叢, **29**, 81-97.

(受稿: 2015.6.22; 受理: 2017.11.24)
